



統合失調症を患う母とともに生きる子ども

～番外編⑤～

素直な言葉



松岡園子

いつもの物語はまだ続きますが、これまでの連載を読み返していて、どうしても皆様に紹介したいと思うものがありました。今号ではそのご紹介をさせていただきます。

これまでのゆりの物語に登場した人物には、モデルになっている実在の方がいらっしゃいます。その方々の存在は、一緒に過ごした時から数十年も経っているのに、1つの物語にしたいと思うほど私の印象に残っているのだと思います。

なぜ、それほど印象に残っているのだろうと考えてみたのですが、私はその方々から当時手紙をもらっており、それを何度も読み返す機会があったことが1つの要因かなと感じました。

お互いの状況が変わり、会うことがなくなっても、手紙に書かれた言葉はその時の自分の感情、情熱、また書いてくれた人の目に映っていた自分の姿を思い起こさせてくれます。

手紙はそうして生きています。

いまの時代は、手紙を書くよりもLINEやメール、SNSでの言葉のやり取りが主流となっています。ゆりが当時の状況のまま、今、12歳だったら、発達している情報ネットワークを使って、何か別の展開を起こしたのだろうか？ などと考えることがあります。

でもやはり手紙に関しては、画面を通して見る言葉と、便せんに書かれた直筆の言葉とは、そこから感じる重みが全く違うように感じます。ここでは、生きた文字のまま載せることができず、活字に変換した言葉となってしまうことが残念ですが、直筆の文字は、時間が経ってもその人を表し続けているものだと思います。

では、ご紹介していきます。

まずは、対人援助学マガジン第33号・1回目連載「1993年のカーネーション～12歳～」に登場していた、ゆりの転校先、奈良の中学校でのクラスメイト、千紗ちゃん（仮名）からの手紙です。

これを書いてくれた千紗ちゃんは、当時のゆりと同じ、12歳で中学1年生の少女です。手紙は、照れくさくて面と向かっては伝えきれないことでも、ストレートに伝えることができる道具だと思います。自分のレパートリーの中にはなかった表現・視点を千紗ちゃんの手紙から感じさせられます。

神戸の家で一緒に暮らしていた祖父に次いで祖母が亡くなった頃から、独り言を話し、何もできなくなってしまった母・夏子とゆりのふたり暮らしを心配した親戚が、ゆりと夏子を奈良の家に引き取りました。

その後ゆりは、奈良の児童養護施設へ入所……となるのですが、その児童養護施設から通うことになった奈良の中学校でのクラスメイトが千紗ちゃんです。「施設ではなく、母と一緒に暮らしたい、神戸に戻りたい」というゆりの思いを応援してくれた千紗ちゃんが、ゆりが母と神戸に戻る前日、奈良の中学校での最後の日にくれた手紙です。

(こちらの) 中学からいっちゃんだねえ。ああ、ああ、さみしいよう〜。あんさんがいっぱい休むようになってからは、「いつかは、やめちゃうんちゃうか！」とは思っていたけど……。私は悪人なので、「吉田さん(ゆりの名字)がいっちゃんいませんように」とおがんでいた。でも、いっちゃんようになったのは、神さんが、「そのほうがいいんちゃう？」と思ったからかなあ、私はよくわからないような。

あんさんがいっちゃんっても、わたしは吉田ゆりという人が捨てられません。いつもにこここ笑っていて、明るくて、やさしくて。見ている、気持ちがいいなあと思うような、すごくいい子だからです。だから、ゆりは、どこへ行っても、きつとうまくやっていけると思っています。(後略)

離れるのはさみしいけれど、相手の意志を尊重して応援してくれる、そのような姿に、12歳の少女ではなく大人の心遣いを感じます。

次は、対人援助学マガジン第45号・第13回目連載「春の風〜後編〜」に登場していた、影山さん(仮名)です。

影山さんは、ゆりが中学卒業後に就職した給食会社からの派遣先に委託業者として出入りしていた、清掃員の60代ぐらいの女性です。派遣された製菓会社の社員食堂での賄いを1人で任されたゆりを、見守り、手伝ってくれた影山さん。ゆりはこの後、製菓会社の派遣勤務から本社勤務へ戻ることとなりますが、この手紙はその前の日にもらったものです。

お別れですね。淋しいね。あっと言う間に4カ月余り過ぎました。早かったですね。本当に良くがんばりました、ほめて上げたいです。自分自身もほめて下さい。胸をはって。大勢の社員の方々にも祝福され、愛され、喜んでもらいましたね。私も色々とお邪魔虫をしましたね。悪く思わないで下さい。(中略) 沢山の人から真心を戴き惜しまれて去

って行くお姉ちゃんは、誰よりも幸せ者だと思います。感謝をして下さい。

お味噌汁やうどんも只ではなくて、お金をもらって商売をしたんだから大したものですよ。素晴らしいことをしたんだから、自信を持って生きて行ってください。まだ若い 15 才 16 才で、誰よりも先に大切なことを学んだことに対し、幸あれと大きな声で叫んであげたいです。お姉ちゃん自身にとって収穫です。(後略)

新しく任された仕事をこなすことに必死な姿を見かねてか、自分の仕事の範囲外なのに、洗い物や後片づけを何も言わずに手伝ってくれていた影山さん。ここでの仕事は自分 1 人の力でできたことではないのに、自分のしてきたことの意味を言葉にしてもらったことで、自信を持つことができました。

最後は、対人援助学マガジン第 47 号・連載 15 回目「未来へ～16 歳～」に登場していた、美保ちゃん(仮名)からの手紙です。美保ちゃんは、ゆりが定時制高校で同じクラスになった、1 つ年上のお姉さんです。茶髪にピアス、お化粧品も綺麗にされていて、最初、顔を合わせた時はヤンキーっぽく見えました。休み時間も自分のクラスにおらず、いつも上の学年の人たちと一緒にいるので、近寄りがたく感じていましたが、ある時、話してみると優しいお姉さんでした。

自分の境遇を明るく語り、前向きに生きている美保ちゃんの姿に触れて、「美保ちゃんにしたら、自分の家のことを話しても、わかってもらえそうだな」と確信しました。美保ちゃんからは、2 回手紙をもらいました。仕事上の悩みを打ち明けた次の日にももらった手紙、卒業式の時にももらった手紙です。卒業式にももらったものは、物語の中のゆりがまだ卒業式を迎えていないため、割愛させていただいている部分があります。

ゆりちゃんは、誰よりも努力家で、人を想いやる心を持っている人だと、あたしは思う。そんな性格が、ゆりちゃんの顔に表れてると思う。ゆりちゃんは、すごくおだやかで優しい顔してるよ。

これから社会に出ていく中で、今まで以上にもっともっと、苦しい事やつらい事、悲しい事もあると思う。悩む日もあると思う。だけど、そんな経験を、自分の大切な宝にして誇りにして、もっともっと強い人になって行って欲しいです。あたしはいつまでも夜は続かないと思う。どんなに暗い深い夜でも、必ず明るい朝は来るから。問題を 1 つ超えるたびにゆりちゃんは今以上に輝けるし、きれいにもなれる。

苦勞を重ねた人ほど幸せになれるねん、必ず。あたしはいつもそう思ってるよ。

こんな言葉を人にかけることができるなんて……強い人だと圧倒された覚えがあります。美保ちゃんが発する言葉だからこそ、まっすぐ心に入ってきました。

どの手紙も、何度読み返しても、心が震えます。私は、これらの手紙の言葉を何度も読み

返しましたし、そのたびに心が励まされました。もらったその時とは状況が変わっていても、読むたびに新鮮さ、純粋さを感じます。

手紙は、紙とペンがあれば書くことのできる簡単な伝達方法ですが、手紙に書く内容は誰かに教えてもらう性質のものでもなく、その人の心から出た、素直な言葉だと思います。他の誰でもない、「あなた」だけに贈る、素直な言葉、それが一番伝わりやすい、大切にされる「言葉」なのではないかと思います。